様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２３８８

研究課題名（和文）人生100年時代を想定した高齢者になるための新たなライフモデルの構築

研究課題名（英文）A New Life Model for Becoming "An Elderly Person" in The 100-year Life

研究代表者
杉井　潤子（SUGII, JUNKO）

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：７０２８００８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は大衆長寿化が進行する人生100年時代に対応した、高齢者になるための新たなライフモデルを構築することを目的とした。2100年には90歳代半ばを迎える高校生がいだく加齢意識、エイジズム意識、将来の生き方指標を検証した。研究結果から老いに対する否定感やエイジズムが根強くあり、高齢期への不安が強いことが明らかとなった。そのために高校生に対して、自らの高齢期について、より具体的かつ主体的に2100年を想定できる教育が重要であること、教育効果が上がれば2100年時代に対する見通しが明るくとらえられるようになること、高齢者世代とより積極的に親密な交流をおこなう必要性が急務であると指摘できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は大衆長寿化が進行する人生100年時代に対応した、高齢者になるための新たなライフモデルを構築することを目的とした。高齢者研究ではなく、具体的に100年生きることを想定しなければならない高校生を対象として、果たして自らの将来をどのように考えているのか、老いや加齢、高齢者差別、認知症忌避に対する意識を明らかにした。さらに、日本と同様に出生率が著しく低下し、高齢化が進行する韓国の高校生の意識と比較検討することによって、日本の高校生の特徴を導いた。さらに高等学校での高齢期についての教育の重要性とその効果を示唆し、ジェロントロジー教育の必要性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to construct a new life model for becoming an elderly person in response to the age of 100 years of life, when mass longevity is increasing. the study examined how high school students, who will be in their mid-90s in 2100, envision their attitudes toward aging, ageism, and future life indicators. The research results revealed a strong sense of denial about aging and the persistent presence of ageism, as well as a great deal of anxiety about old age. The results of the study indicate the importance of educating high school students about aging in order to prepare them to live through the year 2100 more proactively, the need for a brighter outlook on the year 2100 as a result of more effective education, and the urgent need for more proactive and closer interaction with the elderly generation.

研究分野：家族関係学, 家族社会学,1老年社会学

キーワード：人生100年時代　高齢者教育　高校生意識　エイジズム　ジェロントロジー教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

【背景（1)】人口構造の変化に対応した新たな価値観を創生することの必要性

現代日本社会において、いわゆる第２の人口転換である「人口減少」と「老いの大衆化」が確実に進行している。この傾向は今後ますます強まり、現在の若者が 65 歳となる 2060 年には、総人口は現在の約３分の２に減少し、人口高齢化率は約 40%になると推計されている。まさに圧縮された「大衆長寿社会」である。平成 30 年度簡易生命表（2019）によれば、90 歳まで生存する者の割合は男 26.5%、女 50.5%である。リンダ・グラットンは、世界一の長寿国である日本で 2007 年に生まれた子どもの 50%は 107 歳まで生きると予測して衝撃を与えた[リンダ・グラットン,2016]。グラットンの指摘に依拠すれば、「人生が長くなるほど、アイデンティティは人生の出発点で与えられたものではなく、主体的に築きうるものになっていく。これまでの世代は、人生のさまざまな変化を主体的に選択したり、移行を遂げるために必要な能力を積極的にはぐくんだりすることを意識しなくてもよかった。しかし、長い人生を生きる人は、人生で移行を繰り返すことになる。(中略) 過去の世代には必要なかったことだが、私たちは、自分がどのような人間か、自分の人生をどのように組み立てたいか、自分のアイデンティティと価値観を人生にどのように反映させるかを一人ひとり考えなくてはならない」。

【背景（2)】老いの価値の低下と変容により「生きにくさ」を改善することが課題

個人のライフコースからとらえると、「高齢者になること」はもはや自然なことであり、さらに要介護者や認知症の増加という現状をふまえると、同時に「要介護になること」も所与のこととして受け入れなければならないことが求められている。しかし、その一方で、現代社会においては老いの価値の相対的低下とともに、老いを忌避し、「年はとりたくない」「みじめな姿はさらしたくない」「迷惑をかけたくない」という加齢不安が高まっている。個人－家族－社会の３重で巧みに高齢者を差別し排除する社会構造が存在することが指摘できる。具体的には、①固定的高齢者イメージに基づく高齢者神話、②高齢者に対する社会的選別・排除意識、③高齢者に対する差別偏見・エイジズム、④高齢者虐待、⑤介護をめぐる親族間殺人・介護心中や嘱託殺人、⑥高齢者の自己排除・自虐や自殺などである[杉井潤子,2007,2009,2010,2012,2013,2015,2016,2018]。現代を生きる高齢者は自己実現が志向される価値基準のなかで、自立すること、健康を保持することが求められている。要介護になることや認知症への恐怖、不安などケアの受け手となることを忌避する意識がきわめて大きい。また、社会的にも介護ストレス、認知症予防が強調され、財政的にも意識のうえでも介護負担感が根強い。長く生きることが可能であるにもかかわらず、それが「生きにくさ」につながっている社会であると指摘できる。

【背景（3)】臨床倫理学や死生学からのライフモデルへの示唆

臨床倫理学および死生学からは、人のいのちには「物語れるいのち＝人生 biographical life」と「生物学的生命＝生命 biological life」という二重のとらえ方ができると指摘されている[清水哲郎,2017]。単に生物学的に長く生きるだけではなく、人生の物語を紡ぎつつ、いのちを生きるということにこそ価値を見出さなければならない。さらに、人ひとりの存在価値について「居ることはできる。居るのは人々の輪の中にいるということ。周囲の人から肯定され、受け容れられること」、それとともに「私にできる社会貢献は、堂々とみなに世話をかけ、社会的資源に授かり、そのようにして私たちの社会が「誰一人をも切り捨てず、仲間として支える」社会であることを、身をもって示すことである」と説かれている [清水哲郎,2011]

以上の学術的背景をふまえると、人口構造の変化に対応した新たな価値観を創生することが必須であり、老いの価値の低下と変容により生じている「生きにくさ」を解消することが、現代日本社会の課題であると指摘できる。言い換えれば、大衆長寿社会において、いのちを生き抜き、分かち合い、支え合う新たなライフモデルを構築することは喫緊の課題である。この課題は、現在の高齢者世代は言うに及ばず、現在の小・中学生が中高年となる 2100 年以降の次世代を生きていくことを考えると、すべての世代にとっても重大な課題でもある。

２．研究の目的

本研究の目的は、老いの価値を再検討し、大衆長寿化が進行する人生 100 年時代に対応した、高齢者になるための新たなライフモデルの構築を目指すことにある。すでに 2011 年に日本学術会議「持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティの構築委員会」による提言で「小・中･高等学校においては人生 90 年 を生き抜く人生設計力を養い、長寿社会を支える基盤的な力を養うためにジェロントロジー教育を多様な教科、多様な年齢段階で相互に関連付けながら導入すべきである」と指摘されているが、2050 年さらに 2100 年を見据えてマクロ的視野をもったジェロントロジー教育の可能性に着目する。そのために、平成 29 年改訂学習指導要領から初等中等教育においても認知症理解を進める必要性が指摘されていることから、高校生の高齢期理解に焦点を当てることとした。具体的には 2100 年には 90 歳代半ばを迎えることになる高校生を対象とし、加齢意識・高齢者観・老い方についての意識を検証する。そこから、現代日本社会ならではの老いの価値の低下やエイジズムの実相とともに、将来を生き抜くためのライフモデルについて検討する。

３．研究の方法

研究目的に照らして、研究の質的・量的方法は大きく以下４つに分かれている。

(1) 高等学校家庭科におけるジェロントロジー教育の検討

文部科学省検定令和４年度高等学校家庭科教科書「家庭総合」「家庭基礎」ならびに教師用指導書の編集執筆を筆者自身が担当するなかで、学習指導要領に基づき、高校生に対して高齢期理解がどのように進めるかを現場の高等学校教員らとともに検討した。

(2)コロナ禍によって分断された高齢世代や高齢者への課題の検討

2020 年 3 月新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が急速に拡大するなか、集団発生のリスクを下げるために 3 つの密（換気の悪い密閉空間、多数が集まる密集場所、間近で会話や発声をする密接場面）を避けるよう徹底され、その結果、意識化された人と人との「距離」に着目し、高齢者施設の面会禁止や接触交流の禁止に伴って分断されてしまった高齢世代の課題やエイジズムへの影響について検討した。

(3)日本の高校生の加齢意識・高齢者観・老い方についての意識の検証

2021 年 11 月に全国男女各 500 名、計 1000 名の高校 1 年から 3 年までの高校生を対象に Web 調査（調査会社ネオマーケティングに委託）を実施した。調査票配信の対象条件を、①性別：男女　②年齢：15～18 才　③居住地：全国　④その他条件：高専生を除く高校生とした。その結果、回収された分析対象者は、男子 500 名(50.0%)、女子 500 名(50.0%)、高校 1 年 294 名(29.4%)、高校 2 年 341 名(34.1%)、高校 3 年 365 名(36.5%)である。設問項目は、基本属性のほか、高等学校での高齢期についての学び、加齢意識、高齢期への不安、要介護や認知症の方とのかかわりの有無、エイジズム、人生の目標、人生 100 年時代に対するイメージである。

(4)韓国の高校生の加齢意識・高齢者観・老い方についての意識の検証

2023 年 5 月に韓国で高校生モニター700 人を対象とした Web 調査（調査会社 HankookResearch に委託）を実施した。老年社会学研究者で共同研究の実績がある金珠賢氏（忠南国立大学社会科学大学教授）から調査・研究への協力を得た。設問項目は日本と同じであり、同様に少子高齢化が進む若者世代の意識を日韓比較で検討することによって、日本の高校生の特性について検討した。

４．研究成果

(1) 高等学校家庭科におけるジェロントロジー教育の検討

高校生にとって、高齢期の学びは他の衣食住や保育分野の学びに比べて難しいことが明らかとなった。したがって、高等学校家庭科教科書においては高齢期の生き方を高校生が客体としてではなく、できるだけ主体的に考えられるように意図した。とくに認知症についても詳しく言及し、高校生が高齢期になる頃にはどのような生き方や暮らし方が求められているのか、社会全体で支え合いながら、誰もが自らの人生を活き活きと堂々と元気に生き抜くために何が必要かを授業で考えられるように工夫することにした。

(2)コロナ禍によって分断された高齢世代や高齢者への課題の検討

コロナ禍によって面会禁止など高齢者の処遇がどのように影響を受けたのかについて厚生労働省の見解や介護現場での実態を検証した。その結果、高齢者はコロナ感染リスクが高いことにより保護される一方で、面会禁止・接触禁止など過剰とも思われる処遇により、むしろ高齢者が社会的に隔離され、エイジズムにつながる状況が生み出される危険性があることを指摘した。2022 年 10 月 26 日読売新聞でも、原田謙が「コロナ禍で『高齢者は弱い』とのイメージとともに、一部でエイジズム（年齢差別）が広がった。SNS ではコロナの行動制限に不満をためた一部の若者が「年寄りは出歩くな」などと投稿。高齢者側も「自分たちは社会の重荷かもしれない」と自尊感情を低下させ、「高齢者自身によるエイジズムも起きている」と指摘したところである。高齢者の「隔離」や相互交流の「遮断」が人生 100 年時代の人と人との距離に及ぼす影響は大きいと言わざるを得ない。

後述のコロナ禍 2021 年 11 月に実施した高校生を対象にした調査結果から、とくに Fraboni エイジズム尺度（FSA）のなかで高齢者との「距離」に関する項目を取り上げる。高校生が考える高齢者との関わり意識を「距離」で読み替えると、西出らの研究(西出和彦,1985,『“人と人との間の距離”人間の心理・生態からの建築計画⑴」『建築士と実務』No.5)にもとづく「会話域 50cm－1.5m」「近接域 1.5－３m」「相互認識域３－20m」のいずれの場面においても、高齢者とかかわりたくないと思う高校生が３割弱いることが明らかになっている。また、参考までに以前 40 歳以上男女で日本と韓国で実施した比較調査研究の結果（金・杉井,2013）を合わせて、おおよそ会話域から相互認識域の順に集計したものが下図である。

以上から、高校生のほうがエイジズム意識は強いことは明らかである。高齢者との交流や面会が禁止されたことにより、いっそうエイジズムが強まったのではないかということも危惧される。

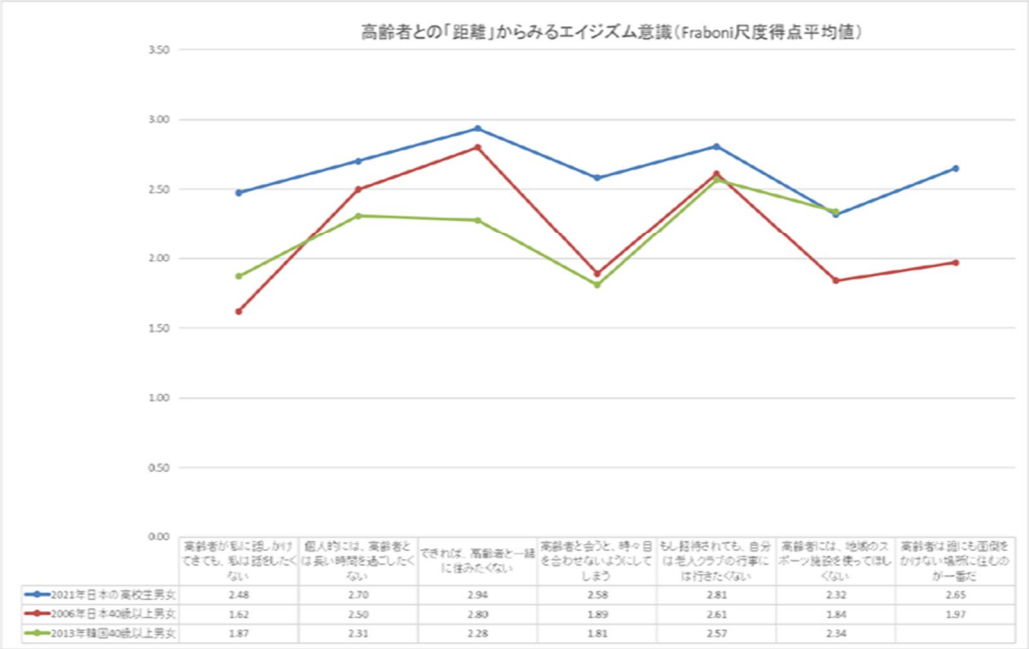
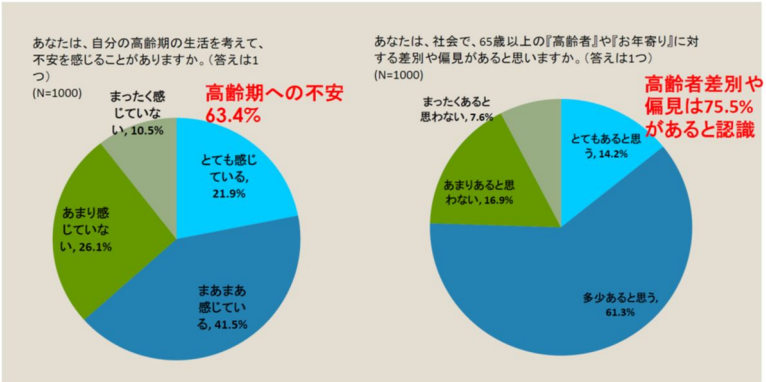


図　高齢者との「距離」（会話域～近接域～相互認識域）からみるエイジズム意識
（Fraboni 尺度得点平均値）

(3)日本の高校生の加齢意識・高齢者観・老い方についての意識の検証

主な結果は、以下のとおりである。

①高校生の 19.9%は身近に要介護者がいること、33.6%は家族や親せき、近所で認知症の人と接した経験をもっていた。約 5 人に一人は身近に要介護者がおり、約 3 人に一人は身近に認知症の人と接点をもっていた。



②60%が高齢期への不安を感じ、高齢者への差別や偏見は 75%があると認識していた。具体的な高齢者に対するエイジズム意識では、高齢者と目を合わせたくない、かかわりたくないという意識が一定程度認められた。

③長生きができる人生 100 年時代については 70%が好ましいと考えていた。

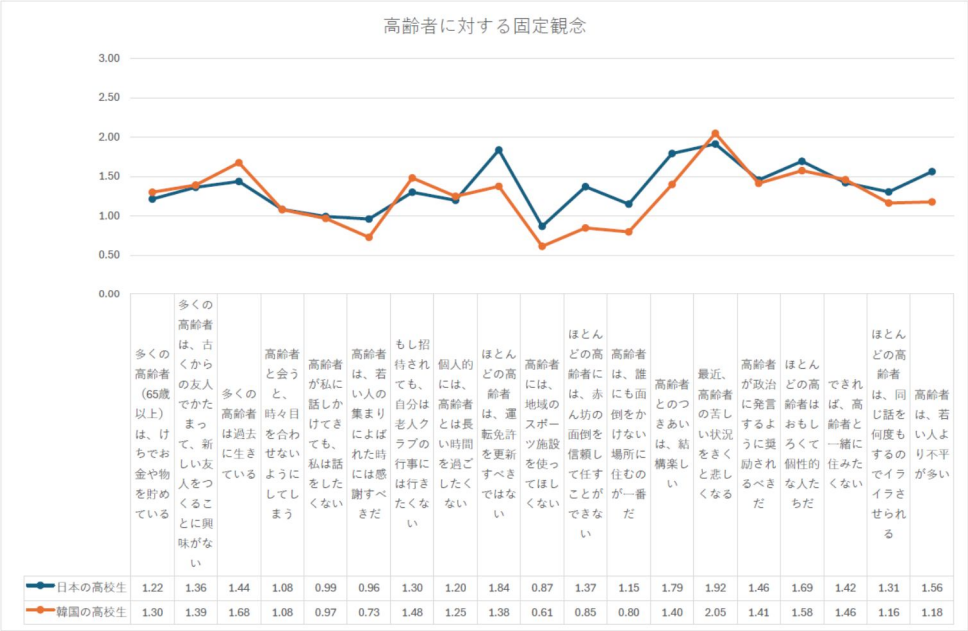
④高齢期の教育との関連では高校で高齢期の授業を受けていて、さらに内容を覚えている人ほど、高齢期への不安は強くなるが、その一方、自分の将来イメージは明るく、人生 100 年時代を好ましいと考えていた。

以上から、日本の高校生は、高齢期への不安を抱え、日本社会では高齢者への差別や偏見であるエイジズムが存在すると認識していた。しかしその一方で、高等学校で高齢者や加齢について適切な知識を習得し、2100 年に想定される自らの高齢期の課題を主体的に理解することができれば、長生きができる人生 100 年時代は好ましいととらえることができることが明らかとなった。

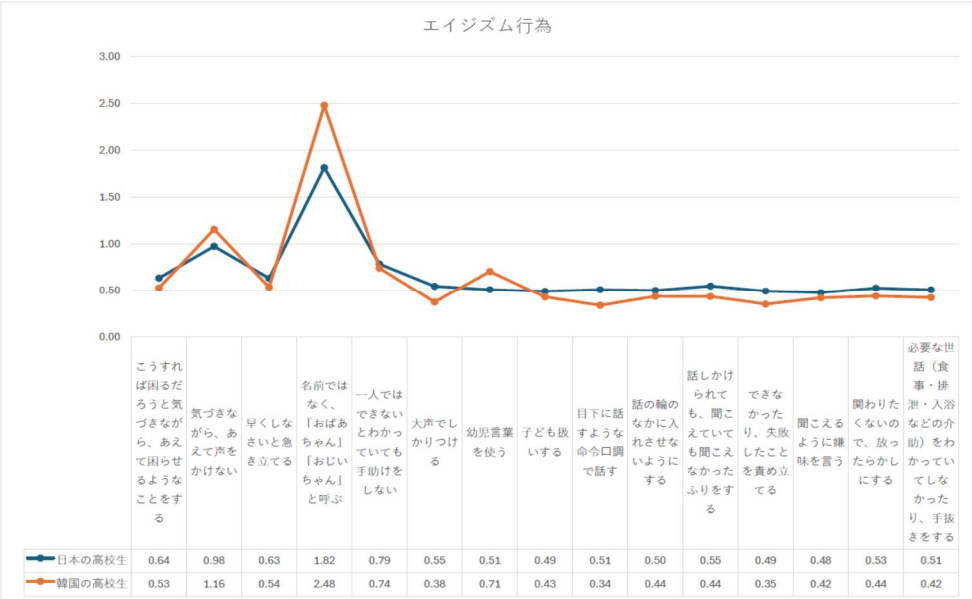
(4)韓国の高校生の加齢意識・高齢者観・老い方についての意識と日韓比較検証

日本と同じ設問項目で韓国の高校生に尋ねた。その結果を日韓比較して示すと以下のようになった。

その結果、日本の高校生は韓国の高校生と比べて、①年をとるという加齢意識では、記憶力や体力が低下し、人生残り少なくなり、家族への負担が増すととらえていた。②高齢者に対する固定観念やエイジズム実態では、より拒絶感や否定感が強かった。③高齢期への不安はより強く感じている一方で、人生 100 年時代に対するイメージは好ましいものととらえられていた。



	多くの高齢者（65歳以上）は、けちでお金や物を貯めている	多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない	多くの高齢者は過去に生きている	高齢者と会うと、時々目を合わせないようにしてしまう	高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	高齢者は、若い人の集まりによばれた時には感謝すべきだ	もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	ほとんどの高齢者は、運転免許を更新すべきではない	高齢者には、地域のスポーツ施設を使ってほしくない	ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	高齢者は、誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	高齢者とのつきあいは、結構楽しい	最近、高齢者の苦しい状況をきくと悲しくなる	高齢者が政治に発言するように奨励されるべきだ	ほとんどの高齢者はおもしろくて個性的な人たちだ	できれば、高齢者と一緒に住みたくない	ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	高齢者は、若い人より不平が多い
日本の高校生	1.22	1.36	1.44	1.08	0.99	0.96	1.30	1.20	1.84	0.87	1.37	1.15	1.79	1.92	1.46	1.69	1.42	1.31	1.56
韓国の高校生	1.30	1.39	1.68	1.08	0.97	0.73	1.48	1.25	1.38	0.61	0.85	0.80	1.40	2.05	1.41	1.58	1.46	1.16	1.18



	こうすれば困るだろうと気づきながら、あえて困らせるようなことをする	気づきながら、あえて声をかけない	早くしなさいと急き立てる	名前ではなく、「おばあちゃん」「おじいちゃん」と呼ぶ	一人ではできないとわかっていても手助けをしない	大声でしかりつける	幼児言葉を使う	子ども扱いする	目下に話すような命令口調で話す	話の輪のなかに入れさせないようにする	話しかけられても、聞こえていても聞こえなかったふりをする	できなかったり、失敗したことを責め立てる	聞こえるように嫌味を言う	関わりたくないので、放ったらかしにする	必要な世話（食事・排泄・入浴などの介助）をわかっていてしなかったり、手抜きをする
日本の高校生	0.64	0.98	0.63	1.82	0.79	0.55	0.51	0.49	0.51	0.50	0.55	0.49	0.48	0.53	0.51
韓国の高校生	0.53	1.16	0.54	2.48	0.74	0.38	0.71	0.43	0.34	0.44	0.44	0.35	0.42	0.44	0.42

以上、2100 年には 90 歳代半ばを迎えることになる人生 100 年時代を生きる高校生がどのような加齢意識、エイジズム意識、将来の生き方指標を想定しているのかを検証した。現代日本社会ならではの老いの価値の低下やエイジズムの実相の解明とともに、将来を生き抜くためのライフモデルの検討については、比較対照群として日本と同様に出生率が低下し、高齢化が急激に進行する韓国の高校生を加えた。

研究結果から、高校生世代においても老いに対する否定感やエイジズムが根強く、高齢期への不安が強いことが明らかとなった。そのために高校生に対して、自らの高齢期について、より具体的かつ主体的に 2100 年を想定できる教育が重要であること、教育効果が上がれば 2100 年時代に対する見通しが明るくとらえられるようになること、さらに高齢者世代とより積極的に親密な交流をおこなう必要性が急務であると指摘できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 杉井潤子	４．巻 42
２．論文標題 人生100 年時代における人と人との距離と関わりの変化 ―コロナ禍での身体的距離の確保をきっかけとして	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本家政学会家族関係学部会『家族関係学』	６．最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24673/jjfr.42.0_23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Justine Le Floc’h（杉井潤子へのインタビュー論文）	４．巻 12
２．論文標題 L’agisme au Japon (年齢差別): perspectives sur la recherche contemporaine	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Traits d'union：La revue des jeunes chercheurs de Paris 3	６．最初と最後の頁 102-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 杉井潤子	４．巻 184
２．論文標題 多様な家庭環境で育つ子どもたち	５．発行年 2021年
３．雑誌名 げ・ん・き	６．最初と最後の頁 2-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 杉井潤子
２．発表標題 人生 100 年時代における人と人との距離と関わりの変化 ―コロナ禍での身体的距離の確保をきっかけとして―
３．学会等名 一般社団法人日本家政学会家族関係学部会　第 42 回 家族関係学セミナー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 杉井潤子
２．発表標題 人生100年時代の家庭科の学び　～主体的に未来予想図を描く生活設計～
３．学会等名 東京書籍　高等学校 家庭科 オンラインセミナー（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 日本家族社会学会	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 754
３．書名 家族社会学事典	

１．著者名 牧野カツコ代表　河野公子顧問	４．発行年 2021年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 224
３．書名 高等学校　家庭基礎	

１．著者名 牧野カツコ代表　河野公子顧問	４．発行年 2021年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 280
３．書名 高等学校　家庭総合	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2023年5月に韓国で高校生モニター700人を対象としたWeb調査（調査会社HankookResearchに委託）を実施した。老年社会学研究者で共同研究の実績がある金珠賢氏（忠南国立大学社会科学大学教授）から調査・研究への協力を得た。設問項目は日本と同じであり、同様に少子高齢化が進む若者世代の意識を日韓比較で検討することによって、日本の高校生の特性について検討した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	金　　珠賢 (Ju-Hyun Kim)	忠南国立大学・社会科学大学・教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	忠南国立大学社会科学大学			